

早稲田大学インクルーシブ教育学会 ニュースレター

2018年（平成30年度）NO.5

第4回研修会 「インクルーシブ教育を 推進するICT活用」

【講師】

ハワイ大学障害学センター准教授
東京大学先端科学技術研究センター
特任准教授 高橋 桐子氏

【プレゼンター】

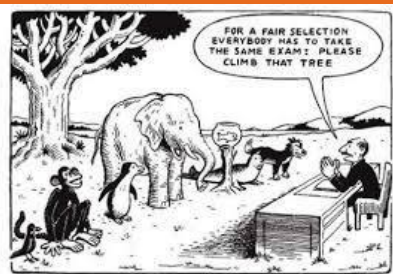
先端研学術支援専門職員 綱川 貴氏
【サポーター】
先端研学術支援専門職員 長田江里氏

2018年11月18日(日)
早稲田大学7号館212教室



ドーナツテンプレートを使って、ドーナツの中心に自分に関する重要なことを、周囲に自分を紹介するキーワードを書いています。

授業で使う場合は、中心にテーマを、周囲にそれに関して知っていることを書き、授業後にも書き足し、何を学んだか、前後の変化を見ることができます。



高橋あつ子先生 挨拶

ICTの活用については、使いたくてもネット環境のない学校、一斉指導の中で教師の指示通りに使う学校など現状は様々です。しかし、基礎的環境整備は数年のうちになされていきます。インクルーシブを進めていくためには、合理的配慮として個別にICTを活用していく場面もあるし、UDLをベースに考えれば、授業の中で全員が個々の学び方に合った活用をしていくこととなります。今日は「未来の教室」で学ぶという感覚で研修を受けていただければと思います。

インクルーシブ教育を推進するICT活用

高橋 桐子先生

メンチメーターを使って

まず初めに、自身のスマートフォンや学会で用意したタブレットからメンチメーターにアクセスし、参加者の内訳や講座へのニーズアセスメントを行いました。メンチメーターは、

すぐにその場で参加者全員の意見を可視化することができます。教室で使えば、手を挙げて発言しなくても、全員参加の対話型の授業が展開できます。

「端末」というハイテクがなければそのような授業ができないかと言うとそうではありません。機械やネットワークがない場合は、「付箋」というローテクが使えます。付箋に書いて貼りに来たり、みんなの意見を見に来るといった動きのある授業づくりも、座りっぱなしのが苦手という特性のある子供には、努力や頑張りを持続させるためのオプションになります。

UDLとATの知識を深め ICT活用の可能性を体験する

授業の目的を果たすためには、参加者がお互いから学びあうことも大事です。そのためには、子供たちにとって温かなクラス、安全なクラスであることが重要なベースになります。

今日の講義の目的と流れの説明の後、クラスメートを分かり合えるようなエクササイズとして、写真のようなドーナツ型のテンプレートを使った自己紹介をしました。次に「THINK-PAIR-SHARE（一人で考えるーペアで話し合うー仲間とシェアする）」というシートを使って、「UDLとは何か？」をブレインストームしました。これらのシートは、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業づくりにぴったりのシートでした。また、紹介されたようなシートを、日常的に授業の中で使うことは、理解のためのオプションの提供にあたるだけでなく、もしペアが書き方を間違えて理解していたり、遅れをとっていたりしても、お互いを補いあうことができます。

UD（ユニバーサルデザイン）とは、「できるだけ多くの人々が、特別な設計を必要とすることなく利用できる製品や環境のデザイン」のことです。

UDL（ユニバーサルデザインフォーラーニング）は、アメリカのCASTが1990年頃から研究開発を始め、提唱しています。物理的な環境だけでなく学習における様々なバリアをなくし、アクセスしやすくすることです。

人は多様で目に見えない違いがあるのに、「公平な試験」と言う理屈で、ゾウにもサルにもペンギンにも同じ木に登らせるのはおかしいことです。服や靴のサイズが全員違う様に、学び方もみんな違います。ワンサイズのカリキュラムではなく、どの子も学べる授業づくりが大事です。

UDL 情報センター www.andante-nishiogi.com/udl/

学びのユニバーサルデザイン (UDL@CAST) 日本語版および関連情報をお伝えするサイト UDL ガイドラインや関連資料を、CAST の許可を得て日本語に翻訳し、公開しています。どなたでもアクセス・ダウンロード可能です。



東京大学 先端科学技術研究センター

http://www.rcast.u-tokyo.ac.jp/about/index_ja.html

アクセスリーディング

<https://accessreading.org>

東京大学 PHED (フェッド) では、AT も紹介し、AT 紹介のイベントを毎月行っています。支援機器ライブラリー <https://phed.jp/>

さらに学習者自身が ICT などを利用して自分に合った学び方を選択できる、学びのエキスパートになることも UDL の概念です。

◀ UDL の 3 つの原則で学びのエキスパートになる ▶

- ・**取組のための多様な方法** ⇒ 目的を持ち、やる気のある学習者になる。
温かく親和的なクラス ・宿題の量の調節 ・自分をアセスメントし、学習方法を教師に伝える等
- ・**認知のための多様な方法** ⇒ 学習リソースが豊富で、知識を活用できる学習者になる。
音声読み上げソフト ・ビデオ ・絵やマインドマップ ・視覚、聴覚のオプション等
- ・**行動と表出のための多様な方法** ⇒ 方略的で、目的に向けて学べる学習者になる。
作文課題の場合、原稿用紙に書く以外のプレゼンテーションやポスターなどのオプションを与える。その際、ループブックを示しておく、生徒もどの方法をとるか選べる。手書きかパソコンか、ビデオでの発表を選ぶ等

ICT 機器の活用をしてみよう。 プレゼンター：綱川 貴先生

はじめに、12 種類のフォントと文字サイズと背景が違う文章を見て、どのパターンレイアウトが見やすいかをグループで話し合いました。パッと見た時の見やすさだけでなく、ずっと読んで疲れないかという視点もあります。この体験で、一人ひとりの読みやすさがレイアウトで違うことがわかりました。紙の教科書は白い背景に黒い文字が多く、その変更調整は難しい。まして肢体不自由がある方や、ディスレクシアがある場合も紙の教科書で学ぶ難しさがあります。

「アクセスリーディング」は、東大先端研の活動で、紙の教科書を読むことが難しい子供のために音声教材を提供しています。アクセスリーディングのミッションは、テクノロジーを利用して、子供自身が自分に合った学習環境を作っていくことです。子供自身が音声読み上げ機能を使って、情報入手するスキルを獲得し、そのスキルを使って、自分の興味から主体的な学習していけるようになってほしい、文字を読むのは辛いけど、耳で聞けば分かるという学習体験を通して、自分の可能性を広げ、学びのエキスパートになってほしいと考えています。

参加者は実際に、iPad を使って教科書を自分に合ったレイアウトに変更調整したり、音声読み上げ機能を使う体験しました。



学校での AT (アシスティブテクノロジー：障害者の生活を助けるテクノロジーとサービス) について

作文を書くエクササイズでは、利き手で、次に利き手と反対の手で、次にひらがなの「か」「す」「の」「に」「は」を使わないで意味のある文章にするという体験をしました。参加者からは、書くことに集中しすぎて何を書いているのか忘れてしまう、力の加減ができない、頭の中にあることが伝えられないといった感想が上がりました。この状態が 1 日続くと考えたらどうでしょう？紙に書いて提出しなければいけないとなったら、できないことが積みあがっていき、それが意欲の低下につながっていきます。ディスレクシアの子供たちに AT があたらうでしょう？ AT にはローテクとハイテクがあります。学校で日常的に使われてる蛍光ペンやバインダー等はローテクで、パソコンや音声認識入力ソフト等はハイテクにあたります。AT はフィッティングが重要です。個別のニーズに合わせたツールを使うことや、そのためのコーディネーターが必要です。東大先端研には支援機器ライブラリーがあり、実際に見て体験して借りることもできるので、AT を使う子供と共に訪れることをお勧めします。そして、AT を必要とする子供がいたら、その使う時期が早すぎるということはありません。

教師として悩むところは、AT と指導のバランスです。カリキュラムや授業をつくる上で、何が一番重要か、本質的な目的・目標を明確にして、AT の活用を決めることが重要です。

AT は、障害者個人へサポートで、UDL は、すべての子供の学ぶ環境のサポートになります。RIT モデルを見た時に、全体に対して UDL のサポートをする、AT にかかるコストもマンパワーも少なくなります。また、学校での活用を進める時、すべてをいっぺんに変えることは難しいので、ハイテク・ローテク含めて ICT 活用や指導方法を、1 学期に何か 1 つ取り入れていくことをお勧めします。

紹介のあった AT ● UD トーク (話している言葉を文字化する機器。無料のアプリです。)

- ノイズキャンセリングヘッドホン (聴覚過敏のある子供に、雑音をカットする機器) ● フォナック補聴器 (教師がマイクを付けることで教師の話す言葉を直接耳に届ける機器。ノイズキャンセリングヘッドホンとの併用も可能。)
- オンスクリーンキーボード「ゾノ」 (装着型エアマウスで、頭を動かすことで文字入力可能。)
- 視線入力 (視線の位置で文字入力可能。)

■ まとめ

参加者は、多様な学び方を前提とした、UDL の様々な実践者でもある高橋桐子先生の講座から、東大先端研の活動から、そして ICT の活用体験から多くを学び、子供たちの主体的な学びのための ICT 活用をイメージし、自身の授業づくりの可能性をさらに広げることができました。

「RIT モデル」3 層構造の教育的介入

